『京大サクセスブック '94 京都大学を知る本』 1994年3月29日。

ロシアがロシアになってから

とうとうソビエトの国がなくなってしまった。このことは長年ロシア語に親しんでいたものにとってさまざまな感懐を禁じ得ない。そしてその後に残ったものは、粗野な資本主義、私の秘かな命名によれば、「空想的資本主義」である。ソビエト期において人々の自由が抑圧され、西欧の目からみれば極端に貧しくはあったが、それでも年寄りは年金で暮らし、遅れてはいたにしても医療は無償で受けることができた。人々は自由にあこがれたが、その中には飢餓の自由も含まれていることに気がつかなかった。

極端なインフレ、エログロ「文化」の蔓延、さまざまな新興宗教、英語からの借用語の氾濫など、太平洋戦争終結直後の日本にそっくりといってもよい、社会現象が見られるようである。

もちろん、だからといってソビエト社会主義の方が良かったといっているわけでは全くない。見聞していた限りでは、むしろ崩壊するのが当然であったろう。しかし、ロシアの人々には申し訳ないことではあるが、ソビエト社会主義というのは、人類の一つの壮大な実験であったといえる。来るべき21世紀のためにも、社会主義のどこが悪かったのか、理論なのか、それとも運用なのか、体制なのかといった問題を、明らかにすることがぜひとも必要であると思われる。それがソビエト体制の犠牲になった人々に対する人類の責任ではないだろうか。そしてそれはおそらく今をおいてはない。都合の悪いことはやがて隠蔽されるからである。歴史や社会科学を学ぼうとする人々の中に、このような問題意識を持つ人々の現れることを期待したい。

これと同じ問題は多少異った形で、いわゆる東欧圏に共通することであるが、なかでもウクライナ、白ロシア、チェコ、スロヴァキア、ポーランド、ブルガリア、セルビア、クロアチアなどはロシア語と同じスラブ語派に属する言語を用いており、必要になれば、ロシア語の知識は、これらの言語の修得を容易にするで

あろう。

トルストイ、ドストエフスキー、ツルゲネフ、チェホフのようなロシア文学は、明治期から日本人に親しまれてきたが、ショーロホフを始めとするソビエト期の文学にも、見るべきものが少なくない。

また思想についても、日本人に親しまれたシェストフ、メレシコフスキー、ベルジャーエフ、あるいはゲルツェンなどの19世紀の思想家の外は、社会主義体制の下では、マルクシズム一色であったと思われがちであるが、決してそうではなく、表には出なかったものの、伝統に根ざした様々なものが、脈々と地下に波打っていたことが、知られて来つつある。

これは宗教についてもいえることである。ロシア正教といわれているのは、ギリシャ正教を受け継いだものであって、ロシアの伝統的な文化を形造る基本的なものであり、ソビエト政権下においても、根絶やしにすることはできなかった。しかしロシア正教に関する出版物はソビエト政権下では手に入れることが極めてむずかしかったのが実状である。これが自由になることによって、今後研究が容易になり、ロシア的なるものの研究が進展する可能性がでてきた。

宗教に関連して一言いえば、宗教の違いがさまざまな民族紛争の根底にあることは、よく知られており、少数民族の問題がこれと密接に絡んでいることが多い。サハリン、カムチャツカやシベリアにも多くの少数民族が居住している。これまでこれらの諸民族の研究は現地調査ができないことによって、日本ではほとんどなされていなかったが、最近環日本海地域研究が意識されてきたことと関連して、この方面の研究を志す人々がまだ少数ではあるが出はじめている。このような研究にも、ロシア語の知識は欠かすことができない。

要するにロシアがロシアになったことによって、研究すべきテーマと問題意識が陸続と露わになりつつある。このような一連の知的興味を満たすためにロシア語の学習は、必ずや大きな力になるであろう。

1995.3.29.